

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	2つのヴィルヘルム像：ゲーテの『兄妹』と『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における選択と基盤の役割
Author(s)	廣石, 卓
Citation	広島ドイツ文学, 35 : 33 - 42
Issue Date	2023-02-20
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053550">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053550</a>
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



## 2つのヴィルヘルム像ーゲーテの『兄妹』と『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』における選択と基盤の役割

廣石 卓

### 序論

本論文では、主としてゲーテの戯曲『兄妹』(*Die Geschwister*)<sup>1</sup>、比較対象の作品として『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(*Wilhelm Meisters Lehrjahre*)<sup>2</sup> (以下『修業時代』)を扱い、『兄妹』と『修業時代』の関連性を、登場人物相互間における行動の選択と、登場人物の経済的な基盤の観点から考察していく。序論ではまず、『兄妹』に関する先行研究を紹介し、研究の目的を述べる。先行研究において、『兄妹』は、登場人物であるシャルロッテと同じ名を持ち、ヴァイマルではゲーテと親交のあったシャルロッテ・フォン・シュタイン夫人との関係性から、または、主人公とヒロインの関係性になぞらえてゲーテと彼の妹コルネリア・シュロッサーとの関係性から解釈されている。<sup>3</sup> 他のゲーテ作品との関連性について論じられることも多く、Hartmut Reinhardt は、『兄妹』を同作家の戯曲『タウリスのイフィゲーニエ』(1787)と関連させ、一連の兄妹をテーマにした作品であるとした。<sup>4</sup> また、『修業時代』に関係する『兄妹』研究では Robert Hering が、ヴェルナーとファブリスの屋敷の改築計画の類似性を挙げている。<sup>5</sup> 日本においては、北原は『兄妹』のマリアンネについて、『若きヴェルターの悩み』(1774)のシャルロッテとの比較から、彼女の少女像を論じている。<sup>6</sup> また、田中は『兄妹』を『シュテラ』(1775)、『親和力』(1809)と比較して、その女性

---

<sup>1</sup> Goethe, Johann Wolfgang: Goethes Werke Dramatische Dichtungen 2.Bd C. Wegner, Hamburger Ausgabe 1949. に拠る。

<sup>2</sup> Goethe, Johann Wolfgang: Wilhelm Meisters Lehrjahre mit einem Kommentar von Joachim Hagner. Frankfurt am Main: Suhrkamp 2007. に拠る。

<sup>3</sup> Dahnke, Hans-Dietrich und Otto, Regine (Hrsg.): Goethe Handbuch, Band 4.1. Stuttgart. Weimar: J.B.Metzler 1998. S.148.

<sup>4</sup> Hartmut Reinhardt: Die Geschwister und der König. Zur Psychologie der Figurenkonstellation in Goethes „Iphigenie auf Tauris“ (23.01.2004). In Goethezeitportal. URL: <[http://www.goethezeitportal.de/db/wiss/goethe/iphigenie\\_reinhardt.pdf](http://www.goethezeitportal.de/db/wiss/goethe/iphigenie_reinhardt.pdf)>

<sup>5</sup> Vgl. Dahnke und Otto: a.a.O. S.148.

<sup>6</sup> 北原博:「ゲーテ『兄妹』における少女像」北海学園大学学園論集 135:41-54(2008) 参照。

像を考察した。<sup>7</sup>

『兄妹』においては、ヴィルヘルム、マリアンネ、ファブリスの三角関係がある。『修業時代』においてはヴィルヘルム、マリアーネ、ノルベルクの三角関係がある。ほぼ同時期にゲーテが着想を得たこの二作品について、作品の構造から『兄妹』を『修業時代』と比較し、ヴィルヘルム、そして2人のヒロインの置かれた状況と選択の仕組みを論じる。

## 第一章 『兄妹』と『修業時代』の概要

最初に『兄妹』について述べる。『兄妹』は、ゲーテがカール・アウグスト公の命でヴァイマルに移住した後に完成させた戯曲である。1776年10月26日に構想を練り、同月31日には既にザイデルに原稿を口述していた。同年11月21日に、初演はハウプトマンの素人劇場で行われ、ゲーテ自ら主人公ヴィルヘルム役を演じた。『兄妹』の自筆原稿は現存しておらず、ゲーテは出版の度に修正を施していた。主人公の名前はヴィルヘルム、登場人物には妹マリアンネ、友人ファブリス、郵便配達人がある。そしてヴィルヘルムの独白、会話内ではシャルロッテが登場する。シャルロッテはヴィルヘルムと恋愛関係にあったが既に死亡している。ヴィルヘルムは、シャルロッテの娘ということのマリアンネに隠して、妹として彼女と暮らしている。ヴィルヘルムはマリアンネに、亡きシャルロッテへの愛と同等のものを感している。ヴィルヘルムの仕事を金銭的に支援していた友人ファブリスは、事情を知らずマリアンネに求婚する。それを発端にして、ヴィルヘルムはマリアンネの出自と血縁関係を彼女に打ち明ける。ファブリスは求婚を取り消し、ヴィルヘルムとマリアンネは結ばれる。

次に『修業時代』について述べる。『兄妹』完成の翌年、1777年2月16日にゲーテは『修業時代』の前段階となる未発表の作品『ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命』(以下『演劇的使命』)に関する記載を日記に残した。その後、十数年の歳月を経て、1794年にゲーテは『演劇的使命』の改作として『修業時代』の執筆を開始した。翌年1795年には『ゲーテ新著作集第三巻』として出版された。『演劇的使命』の着想から出版に至るまで約18年もの歳月を経たこの作品は、ドイツ教養小説の代表的作品に位置付けられている。主人公は商人の息子であるヴィルヘルム・マイスターで、多様な登場人物との交流を経て、精神的に成長していく。『修業時代』の主人公の名前ヴィルヘルム Wilhelm は『兄妹』の主人公と同一の綴りである。また、『修業時代』のマリアーネ Mariane と『兄妹』のマリアンネ Marianne の綴りは n が一つあるかないかというだけで、そこには偶然ではない類似性がある。<sup>8</sup> そのた

---

<sup>7</sup> 田中義充：ゲーテの『シュテラ』、『兄妹』および『親和力』における女性の Typus の問題－1－主要女性登場人物の Typus 久留米大学論叢 26 97-103(1977)。：ゲーテの『シュテラ』、『兄妹』および『親和力』における女性の Typus の問題－2 完－女性 Typus 間の基本構造とその意味久留米大学論叢 27 95-108(1978) 参照。

<sup>8</sup> Vgl. Dahnke und Otto: a.a.O. S.143. マリアンネの名前の由来は Christian Fürchtegott Gellerts の『スウェーデンの G 伯爵夫人の生涯』に登場する女性で、兄妹で恋愛関係にある。

め、『修業時代』においては、ヴィルヘルムとマリアーネの関係が描かれる第一巻に焦点を当てて検討していきたい。

舞台女優マリアーネは婆やのバルバラの勧めで、裕福な商人ノルベルクをパトロンにしている。マリアーネは芝居好きの青年ヴィルヘルムとも関係を持っている。ヴィルヘルムの幼馴染であるヴェルナーは彼らの恋愛を妨害する。ヴィルヘルムはマリアーネの家から出るノルベルクの影と、ノルベルクがマリアーネに宛てた手紙を発見する。彼らの関係を知り、ヴィルヘルムは苦しんだ。

マリアーネの心は裕福な商人ノルベルクと、若き演劇人でもあるヴィルヘルムの間で揺れ動いていた。ノルベルクがマリアーネの家を訪問するまでに、彼女はどちらを選ぶか決断しなければならなかった。最終的にマリアーネは恋心からヴィルヘルムを選んだが、ヴィルヘルムの誤解のためにマリアーネは破滅することになった。彼女にとっては不幸な結末である。

## 第二章 三角関係における純愛と金銭の対比について

『修業時代』の三角関係については、田中岩男の『ゲーテと小説』における恋と経済の関係が先行研究としてある。『修業時代』では、第一巻終盤の夜、最終的にマリアーネはノルベルクと決別し、ヴィルヘルムを選択する。マリアーネは二人の男性を比較しなければならなかったのであるが、それはどの観点からであろうか。『修業時代』第一巻にて、マリアーネは婆やバルバラの問いに対してこのように返答する。

ノルベルクさんが来る。彼に私たちは生活の全てを握られているのです。(略) ヴィルヘルムはとても不自由で、私のために何もできないわ。<sup>9</sup>

経済的な面でマリアーネはノルベルクに支えられていた。ノルベルクを選択し、自身のパトロンとすることによって、マリアーネと老バルバラは裕福な暮らしを続けることができる。マリアーネのこの状況を、田中は、「マリアーネをめぐる物語は、典型的に〈恋〉と〈金〉の二極に引き裂かれる男女の物語として読むことができる」<sup>10</sup>と評す。三角関係を紐解いてみるに、マリアーネとノルベルクの関係は金銭的なものである。一方で、ヴィルヘルムとマリアーネの関係は純愛である。老バルバラいわく「未熟で貧相な奴」<sup>11</sup>であるヴィルヘルムにはマリアーネを養えるような経済力はないのである。更に、田中はマリアーネとノルベルクの関係性について「マリアーネは提供される金銭と引き換えに、〈恋〉の表徴である「純

---

<sup>9</sup> Goethe, Lehrjahre, S.50.

<sup>10</sup> 田中岩男：ゲーテと小説 郁文堂 (1999) 157-158 頁参照。

<sup>11</sup> Goethe, Lehrjahre, S.11.

潔」を「売り渡して」しまっている」<sup>12</sup>として、ミニヨンやヴェルナーと関連させながら、〈金〉によって全てが売買される資本主義的な社会構造について論じていく。純潔や浮き足立つような幸福感、贈り物や商人という個々の事物を概念的に捉え、〈恋〉と〈金〉という語彙に落とし込んでいるこの論を用いることで、『兄妹』との比較を容易にする。本論文では、三角関係にのみ焦点を絞って考察するが、その際、田中の『ゲーテと小説』において使用される〈恋〉と〈金〉の用語を拝借している。

### 第三章 『修業時代』三角関係についての考察

本章では、〈恋〉と〈金〉を用いて『修業時代』の三角関係を詳細に検討していく。マリアーネはノルベルクをパトロンとすることによって〈恋〉を売り渡し、代わりに彼から贈り物などの金品、〈金〉を受け取っている。一方で、マリアーネはヴィルヘルムを愛しており、それは純粋な〈恋〉をヴィルヘルムに譲渡していたと言える。このことは、マリアーネの「彼に私の愛を全て見せつけて、彼の愛を目いっぱい受けたいの」<sup>13</sup>という台詞からも読み取れる。マリアーネはヴィルヘルムから〈金〉を受け取っていない。<sup>14</sup> ヴィルヘルムはマリアーネに「感謝し、身を委ねきっている」<sup>15</sup>のである。マリアーネは、ヴィルヘルムからの〈恋〉を受け取っているのだ。マリアーネに向けられたノルベルクの〈金〉とヴィルヘルムの〈恋〉がマリアーネの選択に影響を与える。マリアーネが老バルバラの言いなりになって、彼女に〈金〉を与える裕福な商人ノルベルクを選ぶならば、不自由なく暮らすことができる。裕福であった元の暮らしに戻るが、対価としての〈恋〉をノルベルクに与えるのみである。マリアーネが、彼女に〈恋〉を与えるヴィルヘルムを選ぶならば、ノルベルクから金品はもう受け取ることができない。マリアーネはヴィルヘルムと結ばれるとしても、今後安定して暮らしていける保証はない。バルバラは、マリアーネが強かに行動すれば問題にはならないと考えている。マリアーネに他の選択肢は無かったのだろうか。老バルバラは以下のように言及する。

若者はいつも極端に振れるのだね。楽しみのもと、利益になるものをもたらす全部を抱えるのがいちばん自然だよ。片方が金を払おうとも、片方を愛するんだよ。<sup>16</sup>

ノルベルクの金銭的な援助を受けながら、ヴィルヘルムの愛を享受する。マリアーネは実際に老バルバラの提案するこの折衷案を受け入れなかった。加えてマリアーネは、ノルベル

---

<sup>12</sup> 田中岩男：前掲書 158 頁。

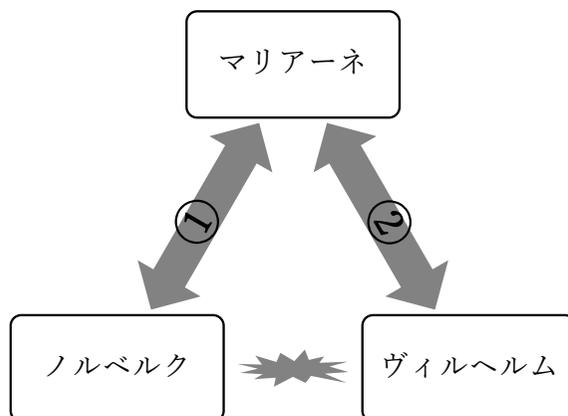
<sup>13</sup> Goethe, Lehrjahre, S.11.

<sup>14</sup> ヴィルヘルムとマリアーネが食事をする際に、ヴィルヘルムがルイ金貨を出すことはあるが日常の諸経費の範囲である。老バルバラはそれを持って料理を買いに出かけた。

<sup>15</sup> Goethe, Lehrjahre, S.37.

<sup>16</sup> Goethe, Lehrjahre, S.68.

クからの〈恋〉の表徴である贈り物を受け取らない。そして、演劇人ヴィルヘルムが演劇で暮らしていくために重要な、演劇人を志す動機となった幼少の頃の演劇体験に、マリアーネは興味を示さない。「ヴィルヘルムが語っているあいだ、マリアーネは眠気を押し隠して」<sup>17</sup>いた。マリアーネは、その選択肢の極端さからノルベルクの中にある〈恋〉、ヴィルヘルムの中にある〈金〉の要素を認めようとしないのである。これによって三角関係には期日が設定され、二要素の対立が明瞭となる。



(図1)

- ①マリアーネはノルベルクに（パトロンの特価としての）〈恋〉を与える。ノルベルクはマリアーネに〈金〉を与える。
- ②マリアーネはヴィルヘルムに〈恋〉を与える。ヴィルヘルムはマリアーネに〈恋〉を与える。

結果的に、マリアーネは〈恋〉のヴィルヘルムを選び、〈金〉のノルベルクを拒絶する。しかし、ヴィルヘルムは誤解から彼女の元を去り、残ったノルベルクも財産の大部分を使い果たして没落していく。マリアーネは劇団から追放され、〈恋〉と〈金〉のどちらも得ることなく破滅するのである。ヴィルヘルム、ノルベルクの視点からこの三角関係を補足すれば、彼らの〈恋〉と〈金〉の対比は更に明確になる。彼らはマリアーネに贈物をしている。ノルベルクは、マリアーネと老バルバラにいくらかの綿と上等な布類の他に、「金一封」<sup>18</sup>を与えていた。一方のヴィルヘルムは「一塊の、指尺の長さの人形」<sup>19</sup>をマリアーネに贈る。ノルベルクの贈物からは、文字通り〈金〉の要素を見て取れる。ヴィルヘルムの贈物からは、彼がマリアーネとの恋愛においては〈金〉の要素を持たないことが印象付けられる。マリアー

<sup>17</sup> Goethe, Lehrjahre, S.27.

<sup>18</sup> Goethe, Lehrjahre, S.9.

<sup>19</sup> Goethe, Lehrjahre, S.16. ヴィルヘルムの幼少期の人形である。

ネは、ノルベルク、ヴィルヘルムの兩人に〈恋〉を与えている。そのため、マリアーネの選択の根拠となるのは彼らがマリアーネに何を与えたかということである。最終的にマリアーネはヴィルヘルムを選択するため、『修業時代』の〈恋〉と〈金〉の対立において〈恋〉が優先されるということが推察される。

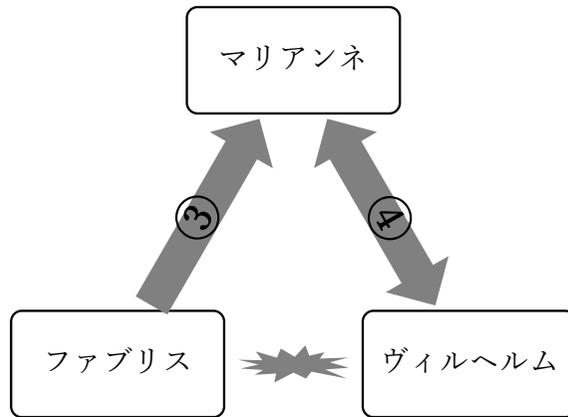
#### 第四章 『兄妹』三角関係についての考察と偽りの兄妹関係

本章では『兄妹』の三角関係について、前章と同様に、田中の『ゲーテと小説』で使われている〈恋〉と〈金〉の対立の観点から論じていく。『兄妹』においては、ヴィルヘルム、マリアンネ、ファブリスの三角関係が展開される。マリアンネは兄ヴィルヘルムを愛している。マリアーネは兄以上に大切な人はいないと考えている。それは同時に恋愛感情でもあり、マリアンネはヴィルヘルムに〈恋〉を差し出しているといえる。ヴィルヘルムは、シャルロットの生き写しの娘であるマリアンネのことを愛していた。ヴィルヘルムからも、マリアンネに〈恋〉を差し出している。この事実は作品序盤で読者に伝えられるが、『兄妹』は彼らが相思相愛となり、このまま幕を閉じるような戯曲ではない。マリアンネは、ヴィルヘルムのことを実の兄だと信じていた。物語の終盤でヴィルヘルムと口づけを交わすときにも、動揺を隠せない。兄妹であるというその事実が、彼らの恋愛関係の成立を妨げていたのである。マリアンネには、直接の経済援助を受けているパトロンはいない。しかし、マリアンネとヴィルヘルムは同居しており、ヴィルヘルムはファブリスという裕福な人物に経済的に支援されていた。ヴィルヘルムと生活を共にするマリアンネにとって、ファブリスは間接的にパトロンであり、〈金〉をマリアンネに与えている。ファブリスがマリアンネに求婚した際にも、「私の財産を、彼の財産に組み入れれば、彼をいくらか苦悩に満ちた時間から解放するだろう」<sup>20</sup>と、ヴィルヘルムの資産の活用方法について言及していた。マリアンネがファブリスと婚約すれば、ヴィルヘルムの商売も更に上向く。兄妹2人の生活の困窮から抜け出せるとファブリスはマリアンネを説得するのだ。マリアンネはファブリスの求婚に戸惑い、選択を保留してしまう。ファブリスに対して、「兄と話して！」<sup>21</sup>とだけ言い放ち、その場を去ってしまう。ファブリスはこれを婚約の同意と受け取り、ヴィルヘルムに報告するのである。マリアンネも『修業時代』のマリアーネと同様に〈恋〉と〈金〉の観点において、選択を迫られる状況に陥っている。

---

<sup>20</sup> Goethe, Die Geschwister, S.361.

<sup>21</sup> Goethe, Die Geschwister, S.361.



(図2)

③マリアンネの選択肢は戯曲終盤までファブリスのみだった。ファブリスはマリアンネに実質的に〈金〉を与える。

④マリアンネはヴィルヘルムに〈恋〉を与える。ヴィルヘルムはマリアンネに〈恋〉を与える。偽りの兄妹関係によって恋愛関係の成立が戯曲終盤まで妨げられている。

ヴィルヘルムとファブリスの視点からこの三角関係を補足していく。ヴィルヘルムは物語序盤、ファブリスに対しての借金を全て返済している。ヴィルヘルムは以前、事業失敗の過去があった。ヴィルヘルムにはファブリスと比べると〈金〉の要素は多く見て取れない。しかし、マリアンネを養っているのは紛れもなくヴィルヘルムであり、マリアンネへの恋愛感情はもはや抑制のきかないほどの大きさである。ファブリスは、マリアンネが「私が彼女を愛しているようには、彼女は私を愛していない」<sup>22</sup>ことを悟っていた。マリアンネとヴィルヘルムの偽りの兄妹関係が崩れるとともに、ヴィルヘルムとマリアンネは結ばれる。このことから、マリアンネに向けられる〈恋〉と〈金〉の対立において、〈恋〉が優先されることが示され、〈恋〉のヴィルヘルムと〈金〉のファブリスという『修業時代』のヴィルヘルムとノルベルクに似た図式を見て取れる。マリアンネの選択肢は戯曲終盤までファブリスのみだった。マリアンネはヴィルヘルムとの〈恋〉は成立しないと考えていた。マリアンネはファブリスに〈恋〉を与えていないが、ヴィルヘルムとの生活をより豊かにするためにファブリスに〈恋〉を売り渡すことも可能であった。マリアンネがファブリスの求婚を受けるようなことがあれば、ヴィルヘルムとの生活を保つためにファブリスに〈恋〉を向けなければならないという『修業時代』と同じ図式になっただろう。実際には、マリアンネとファブリスはヴィルヘルムの勘違いから婚約一步手前であり、『兄妹』の三角関係は膠着状態にあった。マリアンネはファブリスからは〈金〉、ヴィルヘルムからは〈恋〉を受け取ることになり、これを天秤に乗せねばならなかったが、『修業時代』に見られた〈恋〉と〈金〉のルールに則れば、兄妹関係であることを除いて、ヴィルヘルムと結ばれる状態であった。

<sup>22</sup> Goethe, Die Geschwister, S.357.

## 第五章 作品の結末と2つのヴィルヘルム像

本章では、視点を移してヴィルヘルム像について論じていく。『修業時代』の三角関係において、〈恋〉を選択したマリアーネの結末は不幸である。一方、『兄妹』において同様に〈恋〉を選択したマリアンネの結末はハッピーエンドである。前々章、前章にて図式的に説明してきたが、結末を変える要因は見受けられない。「物語の都合で、作品による」と一蹴されればそれで終わりの問題提起ではあるが、何がその要因であるのか。

2人のヴィルヘルムについて人物像を整理していく。『兄妹』のヴィルヘルムは、マリアンネと共同生活をしている。決して裕福な暮らしというわけではないが、戯曲の序盤でフェアブリスへの借金を完済している。一方、『修業時代』のヴィルヘルムは、幼い頃から演劇人として大成する計画があり、その欲求は日ごとに強くなっていった。マリアーネと共に演劇の道で大きな収入を得ようとしていた。しかし、その計画は現実的ではなかった。ヴィルヘルムは、リアルな演劇人であるメリーナに理解を示さない。演劇を取り巻くリアルな状況を認めないのである。マリアーネとバルバラにも、経済的に余裕のない若者として受けとられている。このように読み解けば、ヴィルヘルムという人物は共通して経済性に乏しい。『修業時代』と『兄妹』にのみ関して言えば、恋愛関係が成立した後にその関係性が破綻するかどうかはヴィルヘルムの〈金〉の基盤に左右されるのである。

そして注目すべきなのは、反復するが、『兄妹』のヴィルヘルムよりも『修業時代』のヴィルヘルムが経済性に乏しい、つまり〈金〉の要素に欠けているということである。演劇人を志していた第一巻のヴィルヘルムならば、マリアーネと結ばれる近い将来、その経済性は皆無となる。『兄妹』から『修業時代』へと移行する過程で、ヴィルヘルムの〈金〉の要素が消えていく。『修業時代』は長編小説であり、『兄妹』と比較しても、商人ヴェルナーや団長ゼルロを例に、経済的な要素が強められているにもかかわらず、主人公ヴィルヘルム自身の経済性は低下しているのだ。

## 結論

本論文では、ゲーテ『兄妹』と『修業時代』を比較して、その関連性を論じてきた。主人公の名前はどちらもヴィルヘルムで、『兄妹』のヒロインはマリアンネ、『修業時代』第一巻のヒロインはマリアーネである。『修業時代』の三角関係においては、マリアーネは〈恋〉と〈金〉の純粋な比較の後に〈恋〉を選択する。『兄妹』の三角関係においても、マリアンネは〈恋〉を選択する。同じ選択であるにもかかわらず、『修業時代』第一巻はバッドエンド、『兄妹』はハッピーエンドである。この結末の違いの要因には、ヴィルヘルムの経済性がある。

『兄妹』から『修業時代』への変遷の中で、〈金〉の基盤を持ち、〈恋〉を与えていた『兄妹』のヴィルヘルムから、〈金〉の基盤を持たず、〈恋〉を与えていた『修業時代』のヴィル

ヘルムへと主人公像は変化していった。〈恋〉と〈金〉の対立という観点からみれば、ヴィルヘルムの役割は〈恋〉に傾倒し、より先鋭化されたと分かる。このことは、ヴァイマルの枢密顧問官となったゲーテの、演劇人としてのもしもを創作した『修業時代』の執筆背景とも重なるのである。

## 参考文献

### 一次文献

Goethe, Johann Wolfgang: Goethes Werke Dramatische Dichtungen 2.Bd C. Wegner, Hamburger Ausgabe 1949.

Goethe, Johann Wolfgang: Wilhelm Meisters Lehrjahre mit einem Kommentar von Joachim Hagner. Frankfurt am Main: Suhrkamp 2007.

### 二次文献

Dahnke, Hans-Dietrich und Otto, Regine (Hrsg.): Goethe Handbuch, Band 4.1. Stuttgart. Weimar: J.B.Metzler 1998.

Reinhart, Hartmut: Die Geschwister und der König. Zur Psychologie der Figurenkonstellation in Goethes „Iphigenie auf Tauris“ (23.01.2004). In Goethezeitportal. URL: [http://www.goethezeitportal.de/db/wiss/goethe/iphigenie\\_reinhardt.pdf](http://www.goethezeitportal.de/db/wiss/goethe/iphigenie_reinhardt.pdf)

北原博：「ゲーテ『兄妹』における少女像」北海学園大学学園論集 135:41-54(2008)。

田中岩男：ゲーテと小説 郁文堂 (1999)。

田中義充：ゲーテの『シュテラ』、『兄妹』および『親和力』における女性の Typus の問題－1－主要女性登場人物の Typus 久留米大学論叢 26 97-103(1977)。

田中義充：ゲーテの『シュテラ』、『兄妹』および『親和力』における女性の Typus の問題－2完－女性 Typus 間の基本構造とその意味久留米大学論叢 27 95-108(1978)。

## **Zwei Versionen der Figur des Wilhelm**

### **Die Rolle von freier Entscheidung und finanziellen Verhältnissen in Goethes „Die Geschwister“ und „Wilhelm Meisters Lehrjahre“**

Masaru HIROISHI

In diesem Aufsatz werden die Werke „Die Geschwister“ und „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ miteinander verglichen und diskutiert. Sowohl in „Die Geschwister“ als auch in „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ geht es um ein Liebesdreieck (Wilhelm, Marianne und Fabrice im Einakter und Wilhelm, Mariane und Norberg im Roman). Goethe verfasste die beiden Werke ungefähr zur gleichen Zeit.

Tanaka (1999) beschrieb „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ als eine Geschichte, in der Wilhelm und Mariane zwischen Liebe und Geld hin- und hergerissen sind. Die genannten Figuren stehen also in einem Dreiecksverhältnis. Mariane bekommt Geld von Norberg, ihrem Schirmherrn. Norberg gibt sich als Beschützer Marianes, wohingegen Wilhelm und Mariane einander lieben. Mariane muss sich zwischen Norbergs Geld und der Liebe Wilhelms entscheiden. Sie entscheidet sich schließlich für Wilhelm, den sie wirklich liebt. Die Liebe ist also in dem Dreiecksverhältnis in „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ stärker als das Geld.

Auch in „Die Geschwister“ gibt es ein Liebesdreieck. Marianne hat bis gegen Ende des Stücks nur Fabrice ausgewählt. Fabrice lässt Marianne indirekt Geld zukommen. Marianne hingegen gibt Wilhelm „Liebe“. Und Wilhelm gibt Marianne „Geld“, er kommt für ihre Lebenshaltungskosten auf. Wenn sie hinsichtlich „Liebe“ und „Geld“ so verhalten wie in „Wilhelm Meisters Lehrjahre“, dann wird Marianne sich für Wilhelm entscheiden.

Das Ende von „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ ist unglücklich. Andererseits hat das Ende von „Die Geschwister“ ein Happy End. Ob die Liebesbeziehung Wilhelms scheitert oder nicht, hängt von seiner finanziellen Basis ab. Der Wilhelm in „Die Geschwister“ ist weniger sparsam als dieselbe Figur in „Wilhelm Meisters Lehrjahre“. Wilhelm wirkt im Einakter entschlossener, mit größerem Engagement für die Liebe. Dieses Ergebnis entspricht auch dem Kontext, in dem Goethe „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ schrieb, als er sein Alter Ego im Roman als angehenden Schauspieler darstellte.